

Centimetres

Kodak
LICENSED PRODUCT

© The Tiffen Company, 2000

KODAK Color Control Patches

Blue

Cyan

Green

Yellow

Red

Magenta

White

3/Color

Black

繪本懲瘡軍談

五

1412
54
13



特 13
門 1412
番 5
卷

嶽瘡軍談卷の第五

伯州米子船越敬祐著



活 枯 田 死 巧 手 段
遂 功 全 名 大 團 圓

かくて淳承が二簇の俱生神と共小再自在湯門圓小至王國中の
換ふはる小宴も俱生神の物活る小遠の國の作勢大い
衰諸道諸府全に新る氣血荒肌肉脱ち骨て首の面
淳承ホいけ有掃小心城傷すの慨嘆しつら御王城小者記直小
園の御花小出ま王の左右小の食慾色慾の兩壁は侍臣
隔て衣服美素傲然として坐城の其次小諸の長下次第を
守りて居並びつら其時園の居並りてゆらし淳承は屬玉

さて言名有りし一の屬まき先は無実を珍重するに別より
後吾國ハ無び擾乱ハ微減増起して國勢を重んずるに有るものなる
衣服美麗先生元帥とありて諸の業を以て種々小防戦と書さ
るるといふも賊勢強くとて某軍功以て國家一日より喜ぶ
仍て保生社以て先生を招請したる亦好城忘以速小来りあふ
喜び出さず揚のて何卒美麗公と心合せ國家平治法を
玉の猶此上の幸いあると一の淳重の孫城進め王命を以て
ととも其本社に末流に君若君實小國家を平と致さんと
思ひあり先君の左右に在る所の信好城遠がけ而して後小外寇を
治すに計城を一玉先小某出國の善兵も礼後治せしめ
論ト毒食淫慾城禁トたる小君と城守王玉の信好城者小

誰を再び國亂城招きあへり此のおとくを以て幾度にも同ト重なり
全治に於ては放小此度の微賊進射小越ざる若小先々の信人
奸者城進退に根本の良い城滅して其後合戦小取掛と一と信る
所を云ひくれば國王の赤面一頭城信て物言ひを城安ひて食慾
色慾衣服美麗小同注一三人齊く進んで淳重が若小孫とつ
うけり小淳重汝今王の左右に信好奸者有りとの六杯推城は
てのまゝるるも吾々己小王の左右に在り而も好信城名を
賞給ふ外小奸信の者有りや否や詳小其城法一其流若
胡礼るる時ハ吾々安して汝と申はじと勢いこんで法よすまを
淳重も孫と連一汝等知るはじと思ふや我屬國一向一何と
小て食慾色慾微毒王の賂城受け衣服美麗と心合せ

王の心城遂して悪変と初め國禁と廢して酒肉と引出し女
小交を國元と初め遂に微賊再寇の仇引出して小河
とやと云つてもたてび三人の怒氣満面不遜も城匹夫何ぞ
吾く城誣るる此の志とたや微毒を乃賂と交し而して
方もる此と云はる酒肉城引入も女國と交し一國の氣
力城長善舒散せしめん為なり汝がごとく庸才の者い病
と遣り城知つて作城調つるも城も若く酒肉と
絶ち女國交通城止る時い作妻へ氣替して却て突虎と引
出れぬよい両車城以て國の元と武へ調へ或い教し程よく
和暢せしむる城要と成るふけ及國家の援れ此も又城
用ひたる也小罪を令く先不微賊攻城乃時汝安は延毒丸

後諸の劇將を用ひ國中城仇妨せしめたるふよりて國の
精氣衰たる所へ微賊再攻へたるなり何ぞ是れとて吾く
が飛とすべしとやと吾夫高示城を以て四る城深處へ冷笑ひ
鹿と指して馬と云ふの事と思ひし小汝等い毒とて
某るのしと業城以て毒と云ふ其毒をわくむと云ふ今汝等
がうも常伴の國にりをりそれすら酒肉色も城禁と
たりとてたあがら國の害小るといふと云ふべし持戒の傷
厄のごとく却て元病長壽の國多し是れ城禁とて毒と
引出しをせし業竟國元の情弱より起るの事殊とあるは
ごとく國元已不幸冬も血荒れて汝が故に仇後と云ふも
酒肉色事をとびく禁すべしと云ふるらんといふれはるる

の志よく気血と放蕩し精氣はよりの酒の結氣血を初丸
せしむ肉食の血は増長に微毒の血は和して正氣は虚
より起る者にして正氣実たる時に敢て挾む故に小國を
小治て酒色肉食は止り正氣は補りむるは小治あるは
以て説き惑ひ禁破して毒を戒ふるは國の乱とせし
とあり今小治の志よく罪をゆるぐといふは道徳を
嚴然として弁破すれば食慾色慾の道理小治られ替言を
出さざりて再び首と奉げ智者少も千慮の一矢有りを
國を治るは余の替教の爲に勅めらるるればも其より
て國家乱しとるはつらんごせん其罪とあるべし微毒王より
賤民受りとい何を以てらふや其まは城を人と清くる世に

未だより俱生非我で出づ其流涎の家がも小存の腹を
開て是城見よと一封の書は投あふ食慾色慾の心は
是城披さるる小中ふ教通の書簡有り微賊より送りたる
賤の謝書中して何事も自筆に文書なれば友人のこれ城
見るより顔色忽ち赤らむとせしむるは其の罪を
敢て其の城用るは世有換と見ゆるは國を大い小治
有り不忠不義の人非人諸官人早く被城引出して法乃
おとく断罪小治すべしと有るれば俱生非我を去る大に
許せざるはさるるは彼等の今も中心より國の滅せを
小治るは微賊の賤民違ふる大に其を去るは守れ己が怒を
怒まらばはるるれば担て一命は免し生涯禁濁小慮し其

と淳直も俱く言城添へ終小命と申し之は諸官小下
て引去しむ衣服美藉の五少もたむる顔城赤めて
望したる城國王の訖と見やりあまは是下とて智謀无
双の今と思ひ其言小迷はれ無半小端をかける大乱と
起せしは皆是を承が思より仕出たるるれば今小いと
きて是下と責むるも其甲斐は已後吾玉へ出入
无用なり早く小立去るべし惟り何るあれ引去よと下知小
は是諸官人むらくとまらうる元神の平城取上よげ
危上より退拂へ此の意元掲たるも小い志とかりり頭
をうへ是城室示して國外へ逃去るなり此小於て國王の改
めて元神の印城淳直小渡し乳城厚く一言を早くし

深く先期城悔ひ嘆き再度討賊の事城報こられは淳直は
然として印城受け五里大馬の命兼伏せり去るるは
國中に容身をおする小地度攻め来る者い徳應りりり
あまのくは微毒を自容向せりと受るるは城の付の大事
の軍にして是まで賊將を討ひて同どうべ一朝一夕
よの其功おうるを同心城長くして緩くと防戦一國家乃
惟復城降るべし先早く軍の多死に城せんと國王のお
下王緒業將を呼集り暫く軍後又時と後しるるを
此度の國家十分衰劣の時うれぬ然し於合戦は先
國勢と調理とべしと一役し補中益氣湯小茯苓沃湯若
業等をおそく一万余騎西中へ出で陣とみせ微城は八月と



うけをもちし氣血を補ひし延壽丸の運兵は又百勝と
之妙小懼快し氣血成始る小賊と打殺しむ二符の命
と領し各軍勢を引て打て出で渡りて教の如くあし
合戦とあしび補中益氣湯の茯苓沢瀉芍薬等と共
氣血水と守る個（備環せしめ國氏とあしけ賊徒始を
かゝるとい延壽丸忽ち形を以て一戦又打ちし賊徒
する射の卒のごとくからしむむ初めの程の國氏殺伐と恐
是延壽丸が打て出るといんての本処と去りて殺す門より
迹出るより脱力脱し國勢おろろ小補中益氣湯ホカ
くして接骨し是城を懐かれば店又其恩沢と感し延
壽丸小賊ホと戦ふといども勇く警りて恐を迎ふる事

るく是より國中決死の勢付を氣血水と個の小人狂
利し浮腫消しけき小賊ホ柄と失ふと迹失せ國氏の首
至て國家の政令行りし飲食進んで後力と生し積り個
のい程すし痺痺と欲ふ命と前兆と破ししる淳真が案に遠
りん今及再寇の徽械の應歴腫高のし小河に徽毒大五
自ら出張して微勞必死の術と行ひ國中小眷属をわら
己小九分通を攻めし今平治の氣をいみしと安んじ
飛るる小此頃より小賊ホ追て小弛延を某軍小退す下れ氣
血水の路を急ぐと能く且國氏等と令小懐を以て合戦
小恐む故に延壽丸以て兵を増し數千騎を以て打て出
戦の稍烈しられば應歴もあまが為不敗とあしむと

あり今いふに及ぶ大玉自ら出馬有て物も成すと
報ずれば極毒まはしめて大おせり死は及ぶりいふも
本復の討いりませと思ひし其体よとて國勢再びさる
全枝小程あり人さすればゆりせおすまをさすれは
自ら出陣すべしと依小陣觸とほ勢勢三万余騎威風堂
くともとて國中氣血水の流とるまをがんと瘰癧腫る小瘰
と合せ切取とせんで進まると軍軍の細化はかくと力もより
早速は厚重小告げ初めは早よりて厚直の諸業おとめ
はとて進進の旨と後承し賊徒已小大舉して打ておと
御方も勢をそして是もあつとて今國中勢も稍く回復し
下民結るごと逃散の憂いふられお出逃ふともこの刻

戦を際るるべと下知と傳へ延壽丸小騎兵貳千騎とあり
先小進す也厚重の數千騎して其後小は同く國中推せ補
中益氣湯等へ始のおとる血水の流と修理し下民とあり
國勢と補ふと情々として却從極毒まはし大軍と率て瘰癧と一
ふ小るり國勢と承んで進むお承軍の士卒忽ら止を業軍
前而小屯たりと若まは極毒まは瘰癧と出せ極業の勝敗
此一舉小ありは先陣又進んで決し一戦と僅おせよと命され
は瘰癧へ領受し還兵は千と引て進まはて大音半極毒
大玉法智の茶と遮る何者なりと早く踏と開すは奔城忽
頭小陰んとする様事と止む延壽丸馬と跳してうけおは
瘰癧腫る小瘰すや先夜の合戦おはと打ち逃散かた

おろし今亦自ら来て五と信の能く系小塚の津と者るん
先汝と打殺して後子微毒王と擣まきと捨と扱てさる
奇ら應應も連環槌と打る支方の士卒も得ぬと把り入
引きて戦ひらるる國中已小勢ひ付さ人民攻戦と忍まざる
故小軍雲威を振て切まき微軍遂小負色ふるり後陣
とさしてさんと引く某軍も戦ひ勝まき一久放て追ひ去る小
分て身と信と二はは遠くてもさるり次の淳重が本陣の勢
と微毒王の旗本の勢と迫ると押とせあ方互小攻戦と信
因と作し勢ひとホして白眼合し所小微城の軍門を攻められ
中央小微毒大王衣冠と整入車と系と精去小左右とすのりせ
あづくと推し出し進小淳重と指してわづとや等実淳重と

取殺すべし奴ありし小雷震小妨げられ本意と遂とそれ後
所々の國を控て系眷属と打と今又雷を来つと系軍
威と妨ぐまきの仇るれば此度い系拵つて汝と殺し有まを晴
さんと歎す然も今にも先罪と悔と業まを引連進さるる
それまは汝は信すべし汝今ハ雷平辰ホが馳けは若欲討
せんとするべしそ肯とわとべと一と擧けれバ淳重も車
とすわ惡賊已又滅却は信もかぐり猶无用の大言とるん
やせん遂て系移んごう小汝と信もども用ひば遂小人件はに
寇するが故小系も又は汝を愛し備系もた小國中入り城
徒と殊戦して國家と安定はそ中て徳圓の合戦小汝が股
統の滅びをそく討たを孩も汝と應應をうらうら打残す

の兵を以て安んぞ我勇をよめりるを且汝未だ日か業
の種姓を知りて延壽丸とい雷震傲勅教とい般部治瘥
丸とい辛申青良湯とい伯邑考より汝汝うへたるがゆへ小
神通不測へ女一自在するがれども其勇に於てい金く
かりてはははが弱まて破んと囊の物とあるより易く
其上を是世間より大なるを一心小行を神符と燒く
天地と交りしれどもや汝が妖術拵け失せつてもその切
あぶらうび今其強と見せん留る命観幸して死と多む
べしと云わたり天小向て祈念すれば室中小詳ありて大
聖此よまかり魔軍速に退散せよと二妻三色呪つると奇く
金色の瑞光因に奉り傲軍の陣上と思ふと又下へ傲毒

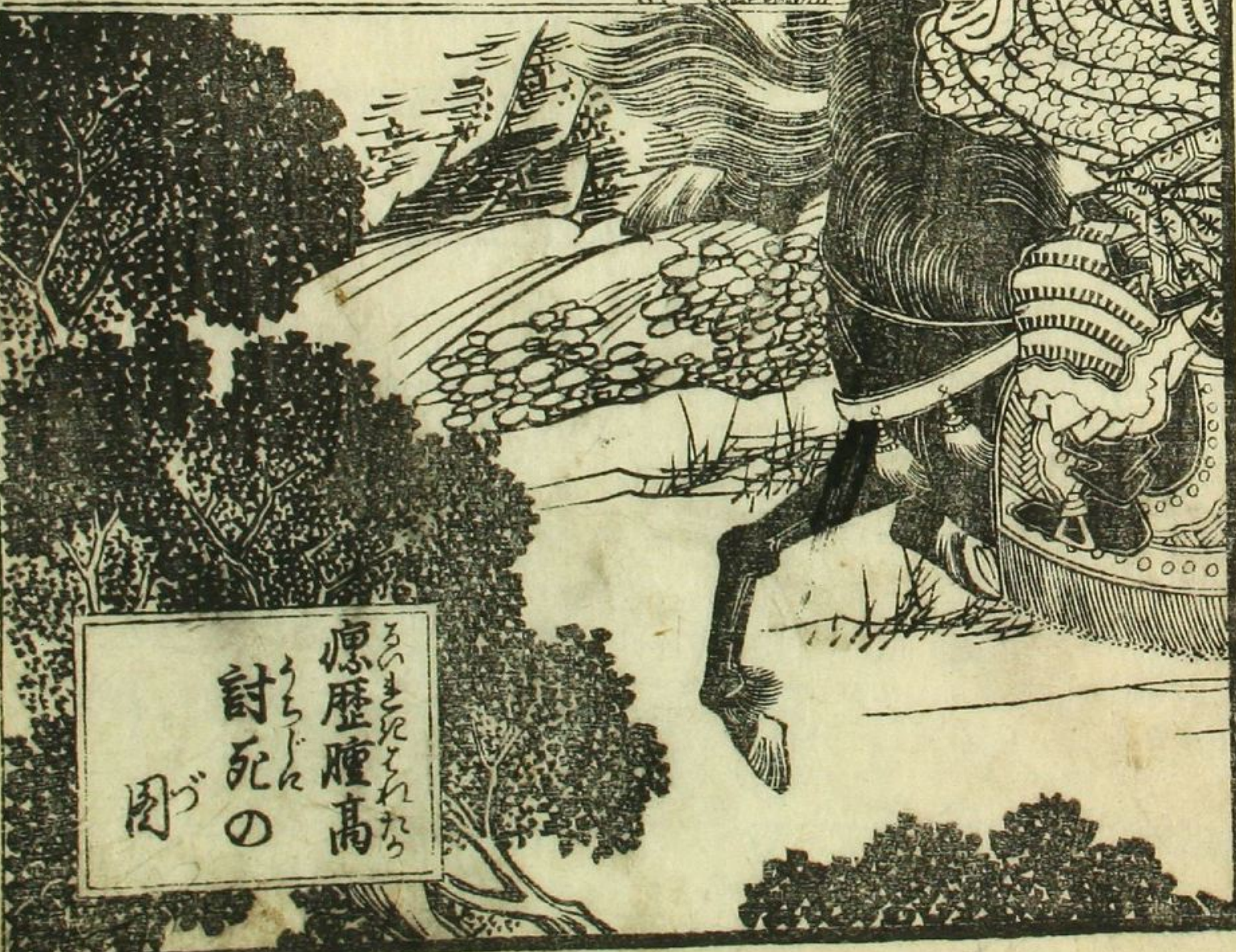
且忽ち入体すくと車より出送振を倒されれば右に車
輪の強を掛け起して介抱し周章するをみるよりも某軍
の勇を多しと見し体も危たる延壽丸とい小威を其く示
りて切まるとい傲軍の立見もる討る者麻の如く七割家
裁を破るも多しと傲毒も小危く入けるが數十騎の士
車輪を止まりて討死する内小徳應腫言系本陣小誘ひ
へは疎ま小下知しては門を閉めさびく防がせられ業軍
も方右るくへ近付さば巨小力致するは漂連車と進め朱
里を兵隊制し漸方一戦不利と偽毒まて此所へ逃るる
上へもこの氣づくひすと小邪と此間を法乃と今く平治す
一と延壽丸小命とて療應が本陣と此方より圍せその

治を止り又延壽丸が部下の精を分て國中と巡行させ
徽斌の舊武者兼小國中の悪民徽斌は心と寄る者とを
見當りまり小討殺さし補中益氣湯を命をばし
つよく補の術をそそせりるゆへ暫くの内小國勢金ぐ元の
おしく小獲しる世間小延壽丸の瘰癧を陣とに方より
き死目と殺し小攻討ら諸所の勢をく攻せし今終小
徽斌毒を瘰癧が籠らる壁一ヶ所よりこれ徽斌毒を瘰癧
小向ひ赤をて及大業と真一救多し人作國と七人と企
たふ天運をくべして淳直ぶれ小攻破られ多し眷属と
失ひ割へふが奇術破きて再び用ゆること何とつべし
延壽丸とくわ皆雷震ホが変身するは極る討いし

勝と地んと思ひもよぐ今討死と賞格と定りたり汝一人
此際とも附添やと身おきていり極うりやれいざや出て出で
あし布く一戦とは終の思ひ赤体人と云へ瘰癧も洞と
あがし味小賞ふまぐ多々の傍撃は皆各國して討死と逃げ
素一人は最後の仇をすこと生前の本懐を小こぼるべし
とくども君后上下終の勢おて出て出たりも勝はこりたる業
軍おついでり敵討るるを名もる死匹まのよふりまたぬん
より悪いんや中自害おて極る一皆討の勢おの素体と
ありと云ひすて望城まらより徽斌毒のよと五て奥推し
きり具後遺を脱して連環懸と投げやり大刀と投げ極と
やうら張まを引て陣門は破きいで徽斌毒の部下おお



毒七の
滅亡の
図



高腫の
討死の
図



人の
人

萬丈不當の名と改る應應腫言最期の一戦するを
思ふ人者の奮て高名かせよと叫びりく奮地切て入るえより
死に究る勇まざるれば某軍の先子忽ち切崩され陣へ
るがれりまば應應のまね間もろく退治り本陣は切こまんと
勇と振るゝ勇戦す延壽丸は是を以て拙と味方の迎撃を
さへはは故と打返して臆病者の目とさゆはこまんと馬と死して
近付きよりつる小應應先程すりの働さるる戦目さゆ
さるるなりつるや某が冥途の引守とあてはせんと歌むれ
つ陰とまゝて向ふさるるては應應の言て一言の答も及び
血不潔たる大刀と打ふる里あ人ませむせび戦ひが應應の
殺別の鉄ひふ力はくれ延壽丸が死双の勇小故すりととむ

遂に馬より下小突着る大將は小付きつれば小卒のいりでの
金さるるとはんやんるが肉小崩れまら礼軍の中ふのこくは命と
預りたりさるるば世勢小管中小卒入り残と驅りむし微
毒まが首とぬきよと延壽丸満軍と下知して陣門と打碎さ
ひつくとはし入るる小管中無人場とあり残去一人も是
す中陣の中央は微毒まを覚く夜冠のまゝとて鴛鴦
實剣とて拍えと足地し自害してわりくれは延壽丸の傍
近く進み寄り色とんげはいつる微毒まを猶わらばは小
さけふの雷震が変身するはが姐已てまをて敵官小珠
せしよりまを相想して止た今も又某病の一対となり
此ふに於て汝と誅伐するぞと彼宝剣と抜きて細首中よ

お着るにたふ不思儀や切口より白銀隠しと云上り其申よ
ア色とたふ赤き悪念と云まづ病とありて人作國と亡が
さんとせしと海と火とる故と運力やとる人作國と亡が
後すると成るべ一應の業と思ひ共小致とて遂まけ敗を
みまふ智勇汝等小捕りたりとて此後汝等が向ふ國へ
再び姿は取すべし今この相処へゆるなりと云ふと
是へ白銀忽ち中より集りやうて消ふる業軍へ
是と見せしと勇と信ひ敵毒王と主候の首と云ふに死
陣をたふ不控と云ふ捕囚と上げて引上まづ淳重の延毒
丸が毎度の功と譽美し今この國中全治したまへ凱陣す
しと諸乃と向ひたる業軍とる一匹一様軍勢とまどありて

王城とてゆへ今この國王の是と云ふは信ひは堪へぬ徳官人と
共と遠く城門の外へ出で是と途へ先守とありて宮様
小誘ひす淳重の城中へ入り國王小捕りて軍の足分と
信ひ敵毒王と主候の首と云ふに死すれは國王の淳重未
と敵と云ふてかゝる凶賊と容易く討ありたりと云ふと實小天祥
の再来と謂ふべし先凱陣と祝し一献と進めんと云ふより
大小宴と設け三日が程山海の珍味と尽して答返し實
義より種々の奇貨珍物とあり出づ淳重諸業お小送り
猶つらとも此まは住しと云ふと云ふ淳重は是と云ふは
ハ兵勇は依依のたふまありたる者なり今己は諸國の城を
拿く亡びたれば敵ん夫のゆくまで替くも猶諒しがごと

いふて國をいさへまむ七ヶ玉の人民は小雲炭小福をた
が君の力かよりて再び福生し珠を我國へ一考なりとむ
二夜まで必死の危難を扱ひむる大恩報たまふ所は
何れともあま今暫く逗留しむとあまがらふ止むれども
渡車に固く輝し功成り名遂て身退く夫の道なき且
兵の凶暴ありを君の財小用ゆぐ大業軍の諸將と
やむゆも今いそ用ふ一某又業軍小難きて位なるを
は速く退散せんと尚くさけしれ又ふれば玉も今い
其言と虚しぐくさくべ別々の宴と催さんと強小命ト
てまひて酒肴と安撫させ坐致樂と奏して自とそ入
もては甚だ丁寧あり誓くくして渡車に國を小待てまの

收り受くる所の恩賞殊貨ホそく群は小ち教し諸業
お小暇とちて時をまらしめを後は天と共と國を信長
俱生非又別とと去まは皆く涙とるばりて別を惜と遠く
送つて郵外に至ると渡車に号と輝しつとも限りあ
トておまはより蹄をまると救く云へ國主諸は俱生非名
残い更おそざれどもたふりて身は悲ざれば遂に國は界
か於て被て分ちおと左へ別をかりかくて五人の者い必累
とあまより虚を遣は飛去る本の雲間またたり付と
互お教と見合せて暮るれと祝し先本の跡は成べしと
延壽丸の心筋のおとく法と妙のいみ人の形は消失て本
おとくるる身体とるじが雷震の渡車小向ひさうは是

より被と分たん此頃の合戦にて微毒遺代の意味は
里をいつらん此後づくも微毒と合戦の時のあつた速
うけつくべしとまへに淳連のそと謝し此以法團の軍を打
猪ち名を揚げたるも今諸君の勇戦と大公を暗小
我が身中ふかへ守りあふとにすりてり諸君天を
降し玉りて大公を小軍しくおまむびと傳く玉よと云内
小雷震るるに己小雲と初り身次起し云いるおん得
より又こそ見えふ今ふたれ足下も中を去られたま
つども淳連の己人の英雄と別るると思ひに依る恋と
て去つるると雷震るるに大公此に足下は頃まで大
元帥とてあくと共々戦國は信を命と酌ふして勇戦と

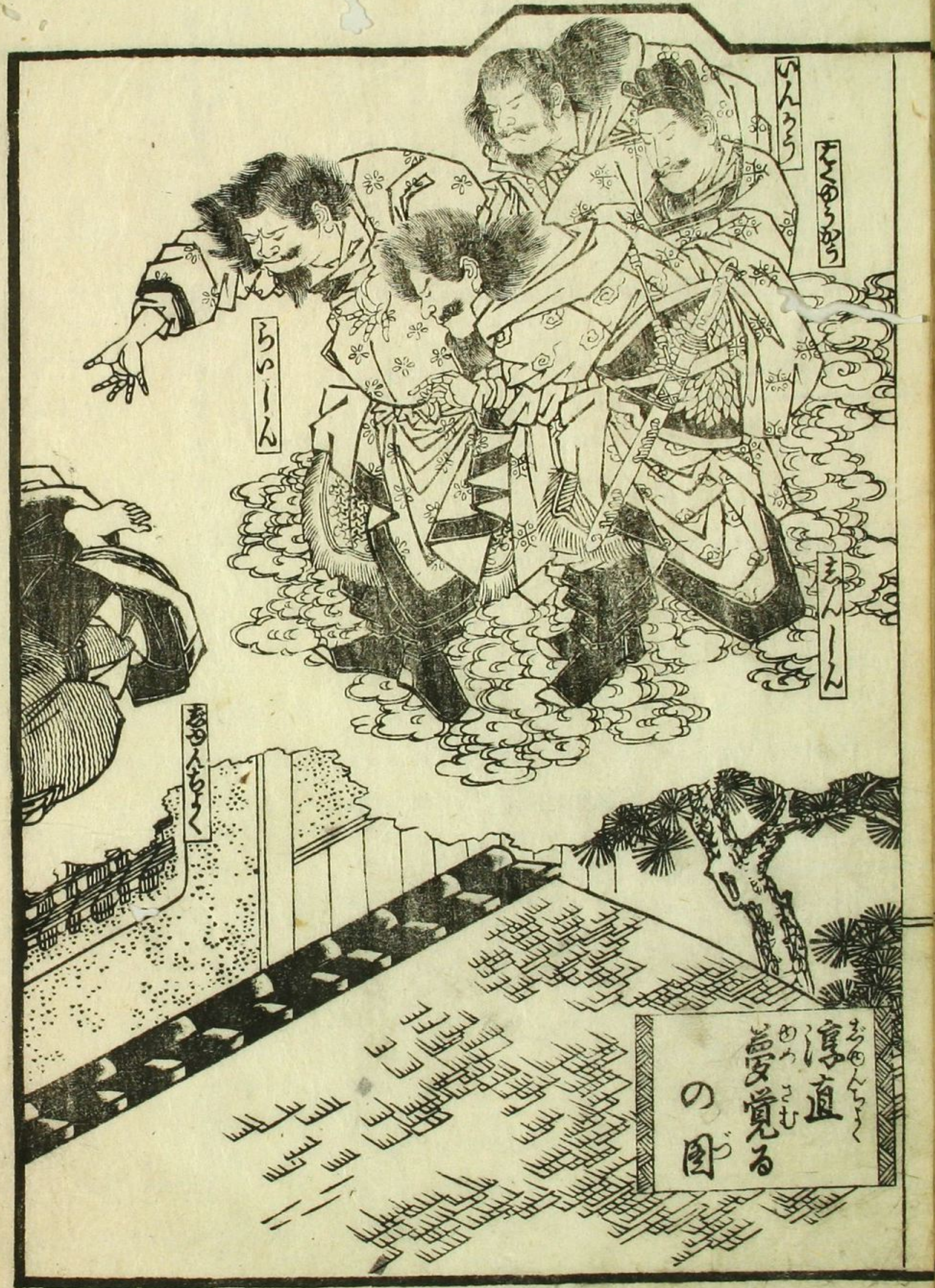
振ふる者が今暫時の別をて情を児女のおと死糸物と
あふの長い似るは一刻も中を御身の肉にゆりまを淳連
が脊とんと突て雲の上より推れし己人の安ん雲小強
まで失おりの淳連は守りてま遂極は落されれむん
物動してあまをとを首へびあつと叫びたる其色あが
耳は徹し愕然とて驚かた是も只是南柯の一夢や
て其身の本の書室の内消んとする残施の下にれよのれ
てうつむもさあがり首て後も心恍惚とて暫く愛愛の境
とあせざりしがやう中かしてあまゆをほろく愛中のまを
考ふる人財國とい人の一身國を主人とい心する俱生
非とい守り非るる

俱生非の別るれども今
備り用いて守り非るる

食慾色慾とい人の



五ノ十七



淳直
の
愛
覚
る
の
因

慈情あり流官人とい心の枝葉ふして國民とい神經ホより
血肉を以て諸物あり賦性即微毒業軍とい方業あり其
我多幸此症の治術ホ心と考したるを神の是を憐んで
人身の容軀病の種を業の活用等と愛といく初せよ
者る人又彼は天王の内治癩丸奇良湯ハ素人なる用る
者るれども其加減の妙ハ世度の愛して發明す延壽丸微
勅教ハ我久しく其方と考しけりといども未だ未だ用ひざ
アハガも愛の意とて推しけり必も花枯肉骨の症
わらんとい其教の明るて後て次の目より此の業と製造
是と病人はよ一減るハ愛中の功は少しも送げ瞑眩緩して
速効あり実ホ奇代の良業なれば淳連ハ日頃の業と成然

あつりとい大いハ喜ば治癩丸奇良湯ハ合せて微業の四
天王と名づけ病の種を病人の虚実とごりて是を用ひ
一ハ此のふり重一者一人も治せざるハ其名大いハ
是病と托し業を乞ふ者門はむりて絶る事ハ是を合
愛の意なればとて服あるがハ淳連自ら業と深し深し
愛中の及びと記しけるがやうて又ハの業とるハハ元よ
是人ハ傳ふることと欲せん其独園の業ハハハハハハハ
友人何素膳写とむるよと止ざれば遂ハハハハハハハハ
あつりとい喜ば其人又是疾人ハ借しとハハハハハハハ
一傳ける故ハ此書今愛りハ查の中ハハハハハハハハハハ
ありふけり

附録

徽毒の病原と論ずる多諸家の説をめぐり陳氏の
 嶺南の地より發するといふ微瘥秘録云く嶺南之
 地卑溼而暖霜雪不加乾濕不整諸凡汚穢蓄積
 於地遇一陽來復溼毒與瘴氣相蒸物感之則微
 烟易毀人感之則瘥瘍易侵と云く西洋説と唱ふる
 者の陳氏が從と破して嶺南の地より起る者なりと云
 よりありと云くさんと代い先くして明末陳氏が時世と於て
 起る何の故ぞ其説甚だ不當なり元來徽毒の濫
 觴ハ紅毛フランセス國人紅毛開闢より一千四百九十四年
 日本明憲三年より南亞にてアメリカ國と見出アメリカ

國アネチリス島を攻侵財寶を掠めたり又婦女を奪ふ
 て船中を收め是と交る者悉く微瘥と發し是より
 紅毛國小流す故にフランスポワクと云ふポワクと
 云ふ瘥といふ疾有り病名とヤウス瘥といふその後
 十年を経て唐土廣東の濶小紅毛賈舶來りて廣
 東人に傳染せしむ故に唐土にてハ廣東瘥といふ後
 日本永祿十二年小室國船入津長崎に定るる英國
 人より長崎人に傳染せしむる故に其をハハ唐瘥と云
 と云く是等皆空論にて取らざるにアメリカといふハ日
 本東南にあり較千里と隔て廣大无边の大國之
 此國の五人は瘥を得る人ハ一人ぞや紅毛人も

知るべし華人も知るべし日本人も猶知るべし余が意を以て云
とたへ此病は天地間一種悪氣の感ぜざるありて天
稟の毒ある者へこそ是は感ぜて病と發すべしなり公
傳傳するも皆是天地間の悪氣なり然るに強て病
原と論ずるは元益のことなり故に本草小毒毒と惡
物の毒の毒の毒ありて其の毒も其の毒なりと云ふは其の毒
乾坤一種の邪氣と云ふべしことすべし凡そ陰邪の
氣凝集するところの皆毒と云ふは此會の地へ罪と邪
者多し牢舎に入る者始終改むべし牢中小毒毒氣
ありて終るまで又日入牢一赦されて定まゆり數日の後
牢毒と發して疥癩の如し癩と發すは皆牢毒と

いふ心熱氣甚し若癩と發せざる者ハ周身疼痛
して其熱氣傷寒の剋症のおとく死する者多し此
るに此毒一度病んで愈るとは再び入牢するも毒
氣と感ずるとは是れ本草小毒一おとく癩癩癩
牢毒と云ふは其毒酷烈して初發の腹痛を以て
邪氣と正氣と辨して其毒者ハ命と損し愈る者ハ
邪毒となす天稟の毒それ其身と和すべし毒あるは
故に再び感ずるとするは之の微毒ハ其初發邪氣と云ふ
也易に故に發熱もせば不食もせば毒氣もかつくと
云ふ一而して其毒ハ容易に播る者あり是れ佛衣の
破石斷藕の喩の如し一葉を害と云ふる者ハ又一葉

二平げ 筋きりけりあり 幼後 終の 下麻 ぶごま 膏葉 或
ハ付葉 又ハ十日 廿日の 葉まで 一度 治する 死ハ何より
心易 死の 極 思ひ 葉と 腹せ 剗刺 とらふ 毒食
房 変と 懐 ず 其 効と 殊 する 由 又 次 骨の 病 赤 漆
入 して 或ハ 目と 候 一 鼻と 指 一 耳と 候 一 色と 啞 免
或ハ 鼻 足 屈 伸 する 由 或ハ 奇 石 怪 岩 の 下 死 面 体 と
あり 恥と 終 身 又 送 一 或ハ 命と 預 ず 余 又 母 也 世 病
小 罹り して 天 年と 終 ず 一 世 とうり 余 又 世 病 小 苦 一 む
と 救 幸 種 の 方 劑と 判 いる と 只 ども 存 ず 寸 効 あり
お とも 此 又 控 一 医 生 小 請 委 一 一 怖 苦 と 漢 舌 一 け
の お しく 幸 又 在 て 長 く 苦 一 まん ず 一 速 又 死 する 也 幸

幸ひ あり 故 とい する 剗 葉 也 忍 意 候 於 十 死 一 生
の 剗 液 と 施 一 五 と 乞 小 彼 医 生 一 一 怪 粉 劑 の 中 七
寶 丸 と 絶 ち 用 也 一 一 下 あり 七 日 ぶ んと 服 せ 一 む 弟
二 日 小 づ かり して 中 腫 づ 一 心 強 なる 二 日 ぶ んと 中 痛 人 也 丸
葉 腹 一 ぐ ぐ 然 と あり 弟 又 日 の 朝 一 度 又 の 一 日 扱 一
そ ず 其 夜 より 口 中 大 又 爛 傷 一 涎 沫 と 吐 くる 毎 日
二 升 ぶ かり け 一 ごと 然 ず 三 十 余 日 中 一 次 亦 不 治 と
病 毒 の 又 一 減 せ ば 彼 医 生 の 一 乞 是 葉 力 思 へ たり あり
猶 七 宝 丸 と 連 服 す べ 一 一 又 是 一 一 取 る 一 一 前 年 十 一
月 より 翌 年 六 月 一 一 あり 一 一 あり 一 一 あり 一 一 あり 一 一 あり
す け 時 一 一 身 體 羸 瘦 一 一 血 肉 枯 一 一 骨 一 一 皮 と

のさうり此のまゝに到及とあして動とたざるが故とさう
服薬と止り糖氣と調へんと肉食するところ六十日ぶり
糖力後一肌肉生じるといふも微瘰の益と甚し其後
又喫薬と用ひるに七日より涎沫と吐き出さるる十日か
及んで瘰毒半の治したるに似ても終る全治せしむ
す故にこれともあて替へて暫く治療と怠り疾く不病毒
以て又再發し其翌年三月に再び苦痛前より加倍
す此時始めて延壽丸の方と發せしむるに苦痛は治せんが
るり業方とて自ら製して是と扱するに中腐輝せし涎沫も
吐き出さるるも漸くは後一凡三十餘日にして遂に治す
全治すに連服するところ百餘日天稟の毒病毒ととも小

そつたる其後二十餘年の今も再び再發の勿論とて傳
染の憂いとそへむを即ち夏中は涼座が云ひし如く天
稟の毒そらると死に其身を和する毒を死後と再び傳
染せざるあり故に微毒と憂うる人別して妻婦もこの
其物毒を往く病根と断るべし一生傳染の毒ばらふ
は若根治せざるに死に已も一生溘苦しとほく人も
傳染せしめ又ハ妻妻子孫小其毒と送すもあるはバ
此病を受くる人の等と利害と赤く全治の道を考へ
医家も又治療の心と金とて誤候あり極まるるべし
あり余が前年の夏と今にして思へばそく誤治あり
るため二十三年の間无益の緩劑と用ひたるも誤り又

種粉丸とて八ヶ月の間刻攻せしも候にいとみえ年
の中へ无益の苦とせばしり是と今治療せしに
り又後劑の山飯來劑と一劑用ひ若功すべし七寶丸と
一劑用ひ是より口中腫つてくるべし又加倍して用ひは
中腫痛むよむりて病治せざれば口中治するを待て
延壽丸と用ひゆるるべし五十年の苦といふは只は五
月よへ全治すべし今世よ余が病とて治療せし
里て救急苦を病茶のたふ身代を失ひ或は瘰癧と
或は邪命小死する者其救急奉て討てりべし傷むる
甚しはるり余が世書と著るはしりてその変とせし
論し長く徹毒の害と免ま令人と欲するのを待て

此病と憂ふる者へ此書と附録の徹毒雜話とを兼交
り讀て其道理と終り心得而して忘病の有さぬ小
よりて用ひてと業と用ひるるべし不實の医者まう
半識の医者業と用ひるるべし遠く猶もて无益の月
日を送るべし无益の全病と費るべし病毒も速く抜く
再患もせし再び傳染するとも死すべし此書小載たる
治術一つとて虚妄あることば若延壽丸徹毒散の二
方とわらはよ出さば天地神明は憐れ大人君子小慚
べしべしうんがせん浪遊无縁の医生るれば世の種
小此二方と秘して教へざるは心中は深く愧るる者
官諸賢幸小優察と垂れよるべし

○自在衛門國の合戦ハ遺毒ヲて周身をいつて癩歴と榮
 せし忘るり葛根加木附湯ハ其業力足らず治瘰丸散
 効散と兼用する小症ニ愈せざる故ををやめ其癩歴
 の治するを待て延壽丸と与へ効を待たれども癩歴未だ
 全治せざる内ニ延壽丸とやめたる故再發せし小死医
 治うれ益の業と久服せし病業のたれ小精氣衰へ
 腕力脱し虚熱と生し大便自下利身體枯瘦し必
 死の症ニ至り始りて心付さ又前医ニ任せし小死補劑
 とて精氣を復し自下利を治し延壽丸と与へて病毒
 と攻め精氣を復する小症ニ延壽丸とほし用いて全治し
 たると云へ者有りすて腕力脱したるに延壽丸

微効散治瘰丸等と用ひれば大便下利する者あり故其
 始りいさづ興へ腕力復する小症ニ延壽丸と与へて
 あり○長條國の合戦ハ下痢骨痛をこめて下利と熱
 毒と下痢痛するゆへ大黃牡丹皮湯と与へて熱
 毒と下痢延壽丸と用いて速効を得ると云へ者有り
 ○万石國の合戦ハ微毒上及して結毒と癩歴とい
 へり腹痛と又肛門腐爛疼痛し食物咽せざれば
 身体羸瘦して精氣やうたれたる症に補劑と興へ
 延壽丸兼用する小症にわさづ興へ精氣復さる小
 症と下痢延壽丸と加信し根毒と根治したる故に
 ことのれあり○肥八國乃合戦ハ爛燭下痢と發し又

鼻梁腫つても耳より髪に頂痛甚しくは病と延毒
丸と用ひれども効ならぬは是れ試みて微効散とて速
小治せしむ其人は健るも故に又梅肉丸とて五七下し
ある者あり○金杏園の合戦は後毒と楊梅瘰癧
たる病は荊蒺敗毒散と後表のおふ兼用し延毒丸
と用ひれども効るく又微効散と用ひて是れ知は治瘰癧丸
と用ひては速に連治したると示す者あり○福松園
の合戦は疥癬と腐瘰癧と肉下瘰癧と淋病ととつふく
合戦とつゝの瘰癧の業疥瘰癧と効るく疥癬の業と微毒
は効るれ者して疥癬は麻瘰癧の毒と微毒は瘰癧乃
どし其病別るともつるり又肉下瘰癧と淋病は山

飯米の依憑する多きゆへは是れ分つるり又腐瘰癧は治
がれ者ゆへは飯米の功とれて予後は延毒丸と用ひ
者あり此の毒と合戦といふ治術とありといへども延
毒丸は遺毒瘰癧下瘰癧の毒と瘰癧は効ありて使
毒楊梅瘰癧と効るれ不わは只其人は愈すと意せ
ざるはて後する者へ是れ用ひて後せざる者も業とあはさ
のし此書より試むるれは只大畧と奉て其用と示
す其変化細毒とありては筆紙の不足は不わは後
用する者自ら知るべし瘰癧の毒不愈と意せは是
と用ひ効の有無といひて此書は出さす亦もか虚延るりと
思ふんと試むるが故に又不救楮と費して其由致と

山王老婆心とふり事志り

船越晋再織

徽瘡軍談五の巻終大尾

畫圖

烽山重春

筆耕

一三之卷 森 晋 三
二之卷 中 彌左衛門
四五之卷 森 英 三
六之卷 浦邊 良齋

剖劔

志保山喜助

